

東方三界黃龍伝

『理由』

小龍

目次

| | | |
|---|------------|----|
| 1 | スカウトマン、セツキ | 4 |
| 2 | 九天玄女隊長 | 13 |
| 3 | 金鬘斗闕の竜吉公主 | 22 |
| 4 | 水雲宮の沙龍 | 30 |
| 5 | エピソード | 36 |

1 スカウトマン、セツキー

紙飛行機からテポドンまで、電磁波から紫外線まで、そして、揺り籠から墓場まで（あ、これは違った）――。

二十一世紀、色んなものが飛び交っているこの時代、ある日突然、道端で、「オー、アナタ、仙骨バリバリあるね。仙人になるヨロシ」

なんて言ってくる奴が居たとしたら、まず間違いなくイカレた奴だ。信じろという方がおかしい。

というか、信じる奴が居たら見てみたい。いや、スカウトマンとしては、複雑なんだけど。

そうそう、名乗るのが遅れた。

俺の名前は清虚^{せいきよ}道德^{どうとく}真君^{しんくん}。

一応『崑崙十二仙』という名前だけはやたら偉そうなグループの末席を汚しているが、古参の玉鼎^{ぎょくてい}あたりには若造呼ばわりされている。

まあ、実際若造だしな。

弟子だってまだ一人しか居ないし、こんな極東の国でスカウト活動やらされてる、しがない仙人ってところだ。

俺の仕事は、この島国で仙骨を持った若者を探し出して、仙人や道士になってもらおうというものだ。

つまり、芸能事務所のアイドルのスカウトとなんら変わりはない。

ただ、決定的に違うのは、どいつもこいつも仙界というものをまるで信じていないという事実だ。

これには、毎度、苦勞する。

だから、俺の仕事は『サンタも仙人も居るわきゃないだろ』と言ってるような現代の若者に、いかにその存在を信じさせるかという所からスタートする。

そもそも仙人って、なに？　ってところから説明しなきゃならない。

まさか『一人なのに千人？』なんて言ってくるやつは居ないけど（いや、夜の新橋あたりには居るかもしれない）、人によっては、地球外生物のような認識をしてみたりする。

だーかーらー、天界の神々は人種が違うけど、俺達仙人は、元はみんな『人界』に居た人間なんだってばー。

……つてところをササミジャーキーを噛み砕くように説明し、次に、崑崙こんろんとガスコンの違いをマカロンよりも軽く説明して、場合によっては電気の方がお得ですよ、なんて電力会社の回し者みたいなジョークを交えて、フレンドリーに会話を進める。

そして、質問受け付けタイムに突入すると、わりと耳ダコなのが、コレ。

「じゃあ、なにか？ お前ら、霞食って生きてんのか？」

随分と間違った認識が浸透されてるらしく、その都度、崑崙の広報部に文句を言ってるんだけど、一向に減らないんだよな。

全く、そんなわけないだろーが。俺達は元は（というかいまも）人間だし、崑崙じゃ電気もガスも水道も、インターネットも完備されてて、あんまり人界と変わらない生活をしてるってことを納得してもらうのに、大抵二時間はかかる。

しかし、本日のスカウト対象は、この質問タイムに突入するのに十分くらいしか掛からなかった。

いまどきの若者にしては珍しい、素直な子のようだ。

「仙骨を持つ人をスカウトして、崑崙にお招きするのが俺の仕事ってわけ。見たところ、凄いな、君。百年に一度のイイ骨してるよー。うん」

俺がいい加減にそう言うと、モトダケンイチ君は懐疑的な視線を向けてきた。しかし、不躰な感じはしない。

礼儀はわきまえているようだ。

『全国の駅名を空で言える天才少年』ともてはやされて、チャホヤされてるらしいから、小生意気でひねくれた男の子だと思います——なんて報告してきた天化は、まだ人間観察眼つてものがなっっちゃいないな。

「センコツってなんです？」

モトダケンイチ君がそう聞いてきた。

これも、マニュアルの説明事項に入っている。

「『仙骨とは、仙人になるのに適した骨格のこと』です」

もう何万回も繰り返してれば、嫌でも覚えるそのフレーズを棒読みにして、先を急ぐ。

「はあ……」

「まあ、君にも君の生活があると思うし、強制する気はないんだけど、この際、スコーンと全部丸投げして、仙人になってみない？」

スカウトの方法も変わったよな、実際。

俺がスカウトされた頃は、まだまだ神秘的な世界が尊重されていた時代で、仙人様といえば、たまに地上にも顔を出す賢者様、って感じだった。

崑崙山と言えば、知らない子供は居なかったし、仙道ってのは、子供達にとってちや『憧れの職業ナンバー1』だった。

だから、俺もあんまり疑問は持たずに崑崙入りをしたわけだけど、いやあ、あの頃はよかったよ。色々規制が緩かったからなー。

いまじゃ、怪しまれないように地上での霊獣・仙術使用は不可、パオペイ宝貝（仙界で使われている便利グッズ）は洞府に置いていかなきゃなんないし、服装だって担当地区に合ったものを着用すべし、と通達されている。

おかげで、俺は、ポロシャツにGパンという姿で、この国で言うところのサークル活動している大学生のような感じで、少年と道端で話しているというわ

けだ。

「まあ、信じられないのも無理はないだろうけど、こっちも仕事なんでねー。と
いうか、これは俺の個人的な問題でもあるんだけど、君をゲットできれば、今月
のノルマ達成で、しばらく有給もらってノンビリできるわけよ」

「は、はい？」

「と、いうことなんで」

ニツコリ笑って、有無を言わずモトダケンイチ君を幻術で眠らせ、紫雲に
のつけた。

「ええーっ!? 君、モトダケンイチ君じゃないのおお!?」

崑崙の防衛庁前で、大声張り上げてしまった。

これで仕事が終わったも同然、と浮かれ気分だったのに、なんてこった!

「オレは本田健一。元田健一君なら、隣町に住んでる五歳の幼稚園児だったと思
いますか？」

「ホンダ……？ モトダ……？」

蒼白になって、手帳を取り出し、確認する。

弟子の天化が送ってきたファックスをそのまま書き留めておいたものなので、これは俺のミスじゃないはずだ。

うおのれ！ 天化め！ 何年日本地区で下調べ任務やってんだ！ 音読みと訓読みの違いくらい、いい加減覚えろっての！

「つまり、人違いだっただけですね？」

「い、いや、結論を出すのはまだ早いぞ、少年」

「結論もなにも、オレはごく普通の高校生だし、ささやかながら将来の夢もあるし、こんなファンタジーな世界で俗念を捨てて仙人なんかになる気はありませんから」

「ファンタジーねえ……」

そう言われて思わず苦笑した。

たまに、スカウトして連れて来る子の中には、ここを夢の楽園だと勘違いして居るものも居る。

仙人とは、俗世を断ち切ったお偉い隠者だと思ってるのも居る。

「違うんですか？」

ホンダケンイチ君が無垢な瞳でそう聞いてきたが、俺は答えることはできなかった。

違うんだよ、本田健一君。俺達は輪廻の苦しみから逃れたいだけの、雑念だらけのアウトローさ。

心の中では、そんな宇宙海賊みたいなセリフを吐いて、表面上はにっこり笑って誤魔化した。

「ところで、人違いと分かったからには、元の世界に帰してくれるんでしょうか？」

「帰りたいの？」

「そりゃ、帰りたいに決まってます」

「あの国に？ 将来年金もらえるかどうかも分からない、煙草の税金あげりやいと思ってるような政治家しかいない、会社も学校も満員電車に乗らないと辿り着けないような、これから格差社会のますます激しくなっていくあの日本に？」

「よく知ってますね」

感心したように健一君が言う。

まあ、伊達に長年あの国を狩場にしているわけじゃないからな。

新聞は毎日三社分読んでるし、情勢を知るために、その国のサブカルチャーに触れるのは、スカウトマンとしては当然の義務だ。いや、権利だ。

あゝ、しかし、どうしよつかなく。もう今月の現場滞在時間はオーバーしちゃってるから、来月まで『人界』には降りれないしなあ……。

「健一君」

と、少年の両肩をガツシリ掴む。

実は、俺は外見から見ただけじゃ、仙骨があるかどうかは分からない。

お偉い十二仙とはいえ、得意不得意があつてだな……、いや、それはどうでもよくて、この子がモトダケンイチ君と同じように仙骨を持っていれば問題ない、ということに気付いたのだ。

「とりあえず、キレーなお姉さんに会いに行こう」

2 九天玄女隊長

俺は、隊長の執務室に向かうエレベーターの中でも、間違いで連れてきてしまったこの少年を、どうやって仙界に留まらせようかと考えていた。

もし、本田健一君が「すぐに帰らせてもらおう！」とゴネたら、面倒なことになる。

一度、こんな摩訶不思議体験をさせてしまった人間を、簡単に人界に帰すわけにはいかないという、仙界側の本音があるからだ。

記憶操作という最終手段もないことはないが、あれは、俺の考えとしてはあまり使いたくない。

一番いいのは、このまま本田健一君にこっちの世界に居ついてももらうことだが、いままでの様子からすると、それも難しそうだ。

となれば、当然、こんなチョンボをやらかした俺は、減俸になったり、最悪、暇を出されるってこともありうる。

それは、遠慮したい。

「『四大美女』（注1）って知ってる？」

「ああ、クレオパトラとか楊貴妃のことですか？」

本田健一君は、この世間話をし出した俺の意図を探るようにして聞いてきた。

「それは人界での話だね。ここ、天仙界にも『四大美女』が居るのよ。悪いけど、うちの『美女』は、楊貴妃なんて目じゃないよ？」

「へ、へえ!？」

案の定、話に食いついてきた健全な少年は、目を輝かせる。

よし、ベタだが、この戦法で行くか。

「この防衛庁にも、その『四大美女』の一人が居るんだよね」

「え？　ここって、『防衛庁』なんですか？　つまり、軍事施設？」

「まあ、そういうことになるけど、どっかの国みたいに徹底した秘密主義でもないし、敷地内に入ったら即射殺なんてことはないから」

ちよつとギョツとした様子の健一君を、慌てて宥めるように言った。

ここは、建物だけは堅牢で大きいが、実情は『軍隊』と言えるほどの規模じゃ

ない。

天界四方軍の、せいぜい一個中隊くらいのスタッフしか居ないし、平時はそのスタッフも仙界内の各地域に散らばっている。

「はあ……、で、ここに居る隊長さんが、例の『美女』なんですか？」

「そうそう。もしかしたら、君にも仙骨があるかもしれないし、隊長なら透視ができるから、すぐ分かると思ってね」

『崑崙防衛軍』というのは通称で、正確には『崑崙山及び西華国全域における自衛を目的とした特殊部隊』と言う。

だから、そのトップは『隊長』で正しい。

俺は、この一スタッフでもある。

普段、スカウト活動をしているのも、実は、防衛軍の仕事の一環なのである。

「しかし、もしその『仙骨』とやらがオレになかったとしたら……？ オレ、元の世界に戻れるんですか？」

健一君がまた不安そうな顔をする。

「帰りたいの？」

「そりゃ……」

と、さつきと同じ問答になったことに、お互い気付いた。

「俺は、君がなんとしても帰りたいがってるようには見えないけどね」

普通、年端のゆかない少年は、いきなり非現実な場面に遭遇したら、こんなに落ち着いていない。

もっとパニックになって喚くとか、これは夢だー夢なんだーとブツブツ言い出すか、なんの反応もできないほど固まるか、のどれかだ。

「……」

健一君は、黙り込んでしまった。

ちよつと凶星だったらしい。

「平和な国や高度先進国とか言われる地域に限って、スカウトの成功率も高いって話、知ってる？」

「……？」

「つまりさ、それだけ色んな感覚が麻痺してるってことだよ」

「どういう意味です？」

「皮肉なことに、文明が進めば進むほど、人間の五感ってものは鈍ってくる。そして、現実と虚構の区別が曖昧になりやすい。普通はさ、道端で『仙人になりませんかー?』なんて言われたら、もうちよつと疑心暗鬼になるはずなんだよね。それを、二時間で説得できる所が怖いと言えれば怖いね」

「オレは、二時間もかからなかったような?」

「そうだね。珍しく素直なタイプだ」

まあ、だからこそ、あまり人界に未練はないんじゃないかと思うわけだけど。

俺がスカウトするターゲットの中には、世の中に絶望してるタイプってのも少なからず居る。

そういう場合は、人界が嫌で仙界に来るのだが、これはあまりいい結果は生まない。

結局、仙界も嫌になってしまうパターンになるからだ。

しかし、本田健一君の場合は、それともちよつと違うようだった。

「そうですね、オレ、詐欺に引っ掛かりやすいタイプですよね……。あまり物事を疑ってないし……」

なんて、健一君が虚ろな目で言うもんだから、元気づけるためにも、『美女』の話に戻した。

「なんにせよ、美しき仙女様に会ってみてから決めたらいいよ」

「そ、そうでした！　どんな人なんです？　やっぱ、ピンクの蓮の花背負ったよ
うな、慈愛に満ちた天女様のような人ですか!？」

「あゝ……」

思わず、笑顔を貼り付けたまま、返答に窮した。

「きつと、目も眩むばかりのキレイな人なんだろうな！　優しくって、優雅で、
鳥が囀るような声で……」

「あゝ……」

一部隊の隊長が『慈愛に満ちた優雅な美女』じゃ務まるはずはないのだが、少
年の妄想は止まらない。

ドゴオツ

と、その時、俺と健一君の目の前を横切るようにして、なにかが飛んできた。

「こんの、腐れ外道がああああッ！」

続いて、そんな怒声が耳をつんざく。

「ごふっ」

飛んできたのは人相悪そうな男だったが、ドアごと飛んできて壁に激突したために、その顔も半分はつぶれている。

三秒ほど遅れて、カツカツと靴音を立ててやって来た隊長が、俺を見て傲然と言った。

「セツキー、丁度イイ、そいつを縛り上げておけ」

「そいつ」というのは、壁に激突してピクピクしているこの男のことだろう。

そして、この男をドアごと蹴り飛ばしたのは、無論、この隊長に他ならない。

「なにやらかしたんです？」

「無銭飲食野郎なんだが、反省のかけらもなく、態度も悪い上に、強制労働を拒みやがった。あまつさえ、脱走を凶ったのでな」

そう言い放つ隊長は、俺の主観で言えば『鬼より怖い上官』だが、客観で言えば、スーパー・モデル真っ青の美女——のはずだ。

案の定、健一君も、このスーパー美女を前にして、固まっている。

隊長は、俺が素早く縛り上げた男の腹を十センチヒールで踏んづけ、ピンクの蓮の花ではなく、ドス黒い般若面を背景に言った。

「お上にたてつく言うんなら、それなりの覚悟があるんやろなあ、ワレエ。日干しになるまで吊るされて、生きたまま烏に目玉抉られたいんかい、ゴルアア？」
もはや、気絶寸前で聞こえてないかもしれないが、男はかすかに首を上下させて、恭順の意を示した。

「最初からそうやって素直に言うことを聞いとりやあええんじや、この愚か者めがっ！」

俺も最初にこれをやられた時は、最下層地獄へ直行する覚悟をしたが、毎日見ていけば免疫も出来るというものだ。

「隊長、新入りが腰抜かしてるんで、その辺で『疲労・死魔邪拳』ひろうをサクつと納めてもらえませんかねー？」

「愚か者がっ！ 簡単に収納できるんなら、『めちや掛けラウンド・ハンガー』は要らんわっ！」

「まあまあ、今度、高級桐箆筒二個セットでもプレゼントしますから」

そう言うと、九玄隊長の極悪な形相が、元に戻った。

「フム、ビジネス便で頼む。で、そこに居るのが報告にあつた少年か。なぜ壁に張り付いたままなのだ？」

「そりや、出会い頭にあんなバイオレンスな場面目撃したら、ああもなるっしょ。それでなくても、彼は平和な日本出身の、まだ十七歳だし」

「そうか。怯えるでない、少年。あんなのは日常茶飯事だ。すぐに慣れる。ようこそ、崑崙へ。私は九天玄女^{きゅうてんげんじょ}。崑崙防衛軍の隊長をしている」

しかし、健一君は、白髪白目の、玄関先の彫刻になつたままだった。

(注1) 四大美女……通常、中国で四大美女とされているのは、楊貴妃、虞美人、王昭君、西施。このフィクションにおける『四大美女』は、九天玄女、竜吉公主、奏欽(南海龍王)、緑麗(故人)。

3 金鬘斗闕の竜吉公主

晴れて、隊長から『仙骨Zクラス』認定を受けた健一君は、魂が抜けたような顔をしていたが、問題はまだ残っていた。

Zクラスというのは、要するに、『あるにはあるが最低クラス』という意味で、仙人修行をしたとしても、道士になればいい方で、なにも会得できずに下山というケースがほとんどである。

そして、中途半端に『人界』に戻ったとしても、当人にとっても周囲にとってもあまりよいことはない。

大抵、修行をしている長大な時間の中で、人界での知り合いは寿命が尽きるし、『仙人になれなかった自分』という負い目を持ったまま、その後の人生を楽しめる者は少ない。

「最低一ヶ月はここに逗留してもらうしかない。それは諦めてくれ」
九玄隊長がビジネス・ライクにそう言うと、健一君は、蚊の鳴くような声で

「はい……」と言った。

仙道達はそう頻繁には人界に降りれないという制約があるので、責任者である俺が彼を日本まで送り届けるにしても、来月まで待たなくてはならないのだ。

「悪いね。責任持って、逗留先はちゃんと探すからさ」

俺がにこにこしながら言うのと、隊長が無言でいまプリントアウトした書類を差し出す。

「……？」

それを受け取って見ると、嫌な予感がした。

冒頭の所在地の欄に、『金鑿斗闕』きんざんとけつとある。

「とりあえず、第一候補だ。セツキー、お前、連れて行ってやれ」

「これ、ちよつと無謀じゃないすかね？」

「しかし、『緊急募集』の欄にあったのだ。あそこは、力仕事のできる下働きは常時必要らしいが、先日の豪雨続きで色々大変なのかもしれん」

「古い建物ですからねー。しかし、俺はあそこには入れませんよ」

基本的に『金鑿斗闕』は男子禁制だ。俺も、健一君も、気軽に行けるような場

所じゃない。

「あのなあ、なんのために変化の術を会得したんだ」

「あ、そうか」

隊長に言われて、普段はあまり使わない仙術のことを思い出した。

健一君は高校生にしては華奢な方だし、女装すれば問題ないだろう。

「どこだろうと、雨風しのげてご飯が食べられれば、いいですよ。オレに出来ることなら、力仕事でもなんでもやりますから……」

まだ、魂がどっかに飛んでるような健一君が健気にそう言うので、同情した。

「じゃ、行こうか」

黄巾力士で金鬘斗闕へ向かう途中、健一君は、ぼそぼそと自分の身の上と、

『ささやかな将来の夢』を語ってくれた。

彼は料理人になりたいらしい。

普通の高校生男子にしては、ちよつと珍しいが、話を聞いて「なるほど」と思った。

「うちは、両親が共働きだったんで、子供の頃から食事は一人でしてました。そ

れも、慣れればどうってことないんですが、一人で食事するのって味気ないんですよ。だから、暖かい手料理をみんなで食べるって風景に憧れてて……」

「じゃ、彼女作っちゃえばよかったんじゃ？」

と、軽く言うと、意外な答えが返ってくる。

「中学の頃、彼女ができたんです。でも、これが、全然料理のできない子でしたねー。逆に俺が弁当とか作って彼女に食べてもらうっていう日常でした」

「へえー」

「それが評判良かったもんだから、よく料理をするようになった……ってのがきっかけですかね。でも、彼女に弁当を作っても、両親に夕飯を作っても、いても、なにかが違った……」

「なにが、違ったの？」

「さあ、自分でも分かりません」

健一君が、モニター越しに見えてきた煌びやかな宮殿に目を見張ったので、会話はそこで終わった。

きんらんとけつ
金鑾斗闕——。

名前からして金ぴかの建物を連想させ、名前だけは天仙界の住人なら誰でも知っているこの宮殿は、色々いわく付きである。

実は俺も、中に入るのは初めてだった。

侍女の可愛い女の子に案内されて奥へ進む間も、健一君は、口を開けたまま天井や壁を見上げていた。

そこかしこにある柱は金メッキされていて、大理石の床もピカピカに磨かれている。

日本の2LDKに住んでいた健一君にしてみれば、信じられないような贅沢な宮殿に映るだろう。

しかし、宮殿の豪華さよりもなによりも、問題なのはここの主である。俺は、写真はよく見たことあるし、蟠桃会の席なんかで遠目に見かけたことはあるが、直接話したことはない。

出掛けに、九玄隊長が『文句なく天仙界一の美女』と言ったせいもあって、健

一君はそわそわしているが、俺はずっと嫌な予感を引きずっている。

(まあ、なるようにしかならないか……)

と、謁見室を兼ねているような広間に姿を現した竜吉公主りゅうききつこうしゆを見て、腹をくくった。

俺がさつき案内係の侍女に渡しておいた、九玄隊長直筆の推薦状が竜吉公主の手に渡ると、公主はそれを見て、二秒後に立ち上がった。

現れた時から厳しい表情をしていたが、それが決定的になったのは、公主が傍にあつた花瓶を鷲掴んだ時だ。

グワシヤツ！

俺がヒョイとよけたせいで、その巨大な青磁の花瓶は、まともに健一君の顔面にヒットしてしまった。

「どあーれがつ！ 男を連れて来いと、言ったのじゃ！ わらわは、男なぞ、雄鶏すら見たくないと言っておろうぐあアツ！」

竜吉公主がヒステリックに、いや、体育会系の雄叫びで叫んでいる。

あ、やっぱり——。

「恐れ多くも、先の副將軍じゃなかった、先の天帝の妹たるわらわの宮殿に、昼間っから堂々と女の振りして乗り込んでくるとは、その命、もはや惜しくないと思ゆる！」

「あ、ヤバ、ちよつ、健一君、起きてっ！」

ひっくり返って目を回している健一君を叩き起こしたが、竜吉公主の怒りは第二段階目に入っていた。

「こ、公主様！ それだけは！」

「金鬘斗闕が崩れます！」

周囲の侍女達が半泣きになって、竜吉公主を押しとどめてくれているおかげで、俺と健一君は、あの折れた柱をトンカチ代わりにして、釘のように打たれずに済んでいるようだ。

あの太い柱をボキッと簡単に折って、あのか細い腕で振り回せるんだから、もう、これは深窓のお姫様のやることじゃない。

噂通り、『文句なく天仙界一の美女だが、文句なく天仙界一の問題公主』だったか。

しかし、竜吉公主の『男嫌い』がこれほど徹底してるとは思わなかった。

「九玄に不幸の手紙を送って、崑崙防衛庁の名前で特上のうな重百人前を注文しておけ！ ええい、そこの男二人も、早く出てゆけ！」

俺の変化は最初からバレてたってわけか。ここら辺はさすがだわ。

「すみませーん。すぐ退散しますからー」

とりあえず、魂どころか内臓までも全部どっかに飛んで行ってしまったよう
な、抜け殻状態の健一君を引きずって、そそくさと金鑿斗闕を後にした。

4 水雲宮の沙龍

光あるところに影がある――。

いや、需要あるところに供給がある――。

這う這うの体で金鑿斗闕から戻った俺達を前にして、九玄隊長があっさり言い放った。

「やはりダメだったか」

「隊長、分かってたんなら、最初から行かせないで下さいよ！」

「万が一ということもあるからな。まあ、いい。ところでな、少年」

と、九玄隊長が健一君に視線を投げる。

すいろうんぎゆう

「水雲宮すいろうんぎゆうで、厨房スタッフを募集している。恐らく、こちらの方が少年には向いてるだろう。主は少年と同郷だしな」

「厨房スタッフ？」

俺は、隊長のパソコンのモニターを勝手にチラ見して、大体の内容を把握し

た。

「ああ、沙龍君シヤロンのところかー。それも、ちよつと色々問題ありな気も……」

「またしてもケチつけるようなことを言ってしまったが、金鑿斗闕といい、水雲宮といい、なんで九玄隊長はこんな厄介な場所ばかりを選ぶんだ。」

「いまこの界限で、一番人界のことに詳しいのは沙龍だからな」

「まあ、沙龍君も元は『四大美女』の一人ってことになるから、健一君も見学がてら、見に行ってみるのもいいかもしれないけどー」

「が、そろそろ『美女』という言葉に反応しなくなった（どころかトラウマになりそうな）健一君には、効果なしかもしれない。」

「りよくれい緑麗は確かに美女だったが、沙龍は『美女』になるのか？ いや、ならんだろう。百歩譲って『美少女』と言ったって、世の美少女に怒られる」

「遠慮ないっすね、隊長……」

「……?」

「友情があつてこそ言えるセリフなのだ」

「……?」

健一君が不思議そうな顔をしているので、説明をした。

「沙龍君ってのは、前世が天界の住人だったんだよ」

「つまり、生まれ変わった、ってことですか？」

「そうそう。輪廻転生と呼ばれる、天界の魂魄管理システムの一つでね」

「はあ」

「とりあえず、行って来い。あそこもダメなら、私の屋敷に部屋が余ってる。そう心配するな、少年」

隊長はそう言ったが、『疲労・死魔邪拳』を見てしまった健一君は、その選択肢は選ばないと思われます。

「どうも。私がこの主です」

荘厳な水雲宮の玄関に自ら出てきたのは、見た目には健一君とそう変わらない歳の人間の女の子——なのだが、彼女の中身とか根性とか経歴は『普通』とは言いがたい。

日本人と言っても、沙龍君の場合は日本に居たのはほんの数年らしいし、本人にもあまりその自覚はないはずだ。

しかし、事情を話すと、沙龍君はまるで背中スイッチを切り替えたように、健一君に対して日本語で話しかけた。

「あー、そりや難儀だったねえ」

この天仙界フィールドでは、話し言葉に限って言えば、ほとんど語学の壁はない。

天界の神々も、仙界の仙道達も、誰が何語を喋ろうが、心の状態を理解できる力さえあれば、なにを言ってるのか分かるからである。

しかし、健一君は、まだそれができていないはずなので、竜吉公主が叫んでいた言葉は理解していなかっただろう。

俺と九玄隊長は日本語ができるので、健一君相手には日本語で話していたのだが、沙龍君の日本語は、多分、俺達よりも流暢なはずだ。

「で、セツキーのポカのせいで迷惑三昧か。そりや、しかるべき所に行って、損害賠償請求とかした方がいいな」

「沙龍君、そりやないよ。それやられると、今度は俺が路頭に迷うんだってば」

「い、いえ、真君には色々気を遣ってもらってますし、オレの方こそ、面倒かけてるような気も……」

ホロリ、と、人情くすぐる健一君の言葉に、俺はなんとしても、彼の終の棲家を見つけてやらなければ、という気になった。

「いい子でしょ!?　こんない子を、放り出すなんて、バチあたるよ!」

「誰も放り出すなんて言っていないじゃないか。実は、募集をかけたのは私じゃないんだが、そういうことならよろしく頼む」

「え?　じゃあ、誰が?」

「料理長だろ。いつも、一人で百人前くらい作ってるそうで、人手が欲しいと叫んでる」

ああ、なるほど、と俺は理解したが、初心な少年は誤解した。

「一人で百人前を?　なにかイベントでもあるんですか?」

「いや、普通のノルマがそれくらいなんだ」

「じゃあ、従業員が多いんですね？」

まあ、水雲宮の規模なら、数百人は収容できるはずだが、いまはここは沙龍君の完全な私邸になってるから、そんなにスタッフは居ないんじゃないか……？

「いや、いまんとこ、ここで暮らしてるのは、えーと、五人だ」

「五人だけ……？」

「そんだけ、大飯食らいが居るってことでしょ」

と説明するも、多分、健一君は分かってない。

「はあ、分かりました。お役に立てるかどうかわかりませんが、一生懸命やります！ 幸い、料理は少しかじってますので、下働きくらいなら出来ると思います」

5 エピローグ

それからしばらく、俺は別の仕事で忙しくしていたせいですっかり忘れていたが、半年も経った頃、九玄隊長に境界越えの切符を貰って、水雲宮の様子を見に行った。

責任上、自分が間違えてスカウトしてしまった子がどんな毎日を送っているのか、ちゃんと見届けなくてはなるまい。

「来てくれたんですか！」

健一君は、以前とは比べようもない晴れ晴れとした感じで、俺を見つけると、いままで洗っていた野菜を籠に引き上げて、ちよこちよこことやって来た。

「うん、元気そうだね？」

「はい。なんとか。あ……」

健一君はすぐに、厨房の奥で仕込みをしているらしい料理長を伺うように振り返ったが、中年の料理長は俺を見て会釈すると、「ちよつと休憩してこい」と健

一君に言っていた。

「いいお師匠様じゃない？」

「そうなんですよ。料理長は厳しいけどいい人だし、他の従業員の方々も優しいですから」

「そっか。いい職場環境なんだね」

厨房の裏口から、湖の畔への小道が続いている。

この裏庭にあたる場所は作業場も兼ねているようで、そこかしこに積み上げられた野菜籠や、ビールケースなんかがあった。

「で、結局、残ることにしたんだ？」

そう聞いたら、健一君は恥ずかしそうに頷いた。

「まだ、人生迷走中なんですけどね」

「その若さで迷走してない方がおかしいよ」

「ハハ、そうですね。……オレ、好きな子もできちゃいました」

「へー。もしかして、いつも沙龍君を叱ってる、あの可愛い子かな……」

水雲宮に行くと、必ず出迎えに来てくれる子だ。見た目には健一君と釣り合う

年頃だろう。

もう一人、綺麗な女性が居るが、そっちは人妻らしい。

「でも、彼女、実は他の人に夢中なんですすよねー」

「フーン。前途多難だねえ」

「でも、悠花ゆうかちゃん、可哀想に失恋確定なんです。だって、その夢中になつてる人つてのが……」

「妻帯者とか？」

「いえ、それよりも、性質悪いかも……」

「ああ、あつちか……」

と、妙に納得した。

天界のゲイ率は仙界よりも数倍高い。

それもこれも、先帝の玉皇大帝ぎょくこうたいていがソツチ系の人だったので、数千年前から既に市民権を得ていたという話だ。

「そんなわけで、オレとしては、悠花ちゃんがハートブレイクした暁には、そこに付け込もうという下心もすっかりあるわけです」

「ふうん。でもさ、ホントは違うんでしょ？」

「え？」

「君がこの世界に残ることにしたのは、どうして？」

「ああ……」

俺の質問の趣旨を理解した健一君は、数秒間黙っていたが、ポツリ、と漏らした。

「自分の居場所を見つけたから、かな」

うん。それが正解だね。

与えられた世界と、与えられた環境で、君はそれをやってのけたんだよ。

「オレ、前に、彼女に弁当を作ったことがあるって話、しましたっけ？」

「うん、聞いた」

「両親にも毎日のように食事を作って、でも、時間帯が合わないから一緒に食べることはなかったんですけど……」

「うん」

「彼女も、両親も、多分、喜んでくれてたんだと思うんです。彼女は『すごー

い。私はこんな作れない』なんて言って食べてくれてたし、母親はオレに面倒をかけてると思ったのか、『いつも作ってくれなくていいのよ』なんて言ってたし。でも、オレが聞いたかったのはそういう言葉じゃなかったんですよね」

「……」

「緑麗様は、いつも『頂きます』と『ご馳走様』を言ってくれるんです。信じられない量を食べるんですけどね、あの人」

「アハハ、沙龍君はさー、妊婦みたいなもんだから」

「本人もそう言ってました。神獣の保持者って、象のペット飼ってるようなもんですよね」

沙龍君がその身に抱えている『黄龍』は、それだけで莫大なエネルギーを消費する。

あの小さな身体で大食漢なのもそういう理由なのだ。

「うまかった！ ごちそう様！ って、いつも言うんですよ。あれを聞いていると、普段の偉そ……いや、豪快な態度とかも気にならなくなるから不思議ですね」

「そうか」

迷える子羊を救済したのは、俺ではなく、同郷の小さな女の子だったか。

いや、きっかけを作ったのは沙龍君だとしても、結局は、日々、大量のジャガイモを剥いたり、大鍋を洗ったりして頑張った健一君の勝利だ。

俺はなんとなく反抗期の頃の天化と、その後の成長ぶりを思い出して、ジーンとしてしまった。

「あの、ありがとうございます」

照れくさそうに、少年が言う。

「え？ なにが？」

「心配して、様子を見に来てくれたんでしょう？」

「あー、うん、まあね」

半年忘れてたということとはとりあえず内緒にしておこう。

「俺はあんまり気軽にここには来れないからさ、次に会うのは何年後になるか分からないけど。頑張れ、健一君」

「はい！」

少年の快活な返事を聞いて、俺は我が家のある青峯山せいほうざんへと戻った。

【終】

